世界遺産への登録をめざす
武家の古都・鎌倉ニュース
Vol.18
冬号 / Winter 2011
第18号 平成23年（2011年）1月発行
発行：鎌倉世界遺産登録推進協議会
編集：広報部会　編集人：内海恒雄

神奈川県知事と鎌倉市長が文部科学大臣へ要請

平成22年10月4日（月）、松沢成文神奈川県知事と松尾崇鎌倉市長が4県市（神奈川県、横浜市、鎌倉市、逗子市）を代表して、髙木義明文部科学大臣と近藤誠一文化庁長官を訪問し、改めて「武家の古都・鎌倉」の世界遺産登録に向けた今後の準備作業について、国の協力を要請しました。本年度の国からユネスコへの登録申請は見送りとなりましたが、早期の登録の実現に向けて要請を行ったものです。

大臣及び長官からは、「現段階では推薦の時期を明言することはできないが、推薦書の作成に向けてできる限りサポートしていきたい」との言葉をいただきました。

髙木文科相（中央）に支援を要請する松沢知事（左）と松尾市長（右）

4県市では、国際専門家会議で指摘された課題等について検討を進め、推薦書案を平成22年度中に仕上げていくことを目指して、文化庁と協働して取り組んでいきます。

◆ 世界の目線で…リシャール・コラスさんと星野知子さんが対談 ◆

シンポジウム「世界のなかの鎌倉」開催

右から、星野知子さん、リシャール・コラスさん。

10月23日午後、鶴岡八幡宮直会殿で推進協議会主催のシンポジウム「世界のなかの鎌倉」が開催されました。シャネル社長リシャール・コラスさん、文化庁の世界遺産特別委員会委員で女優の星野知子さんの基調講演の後、対談でユニークな意見を提示されました。

リシャール・コラスさん

なぜ世界遺産をめざすのか。目的は明確にしなければなりません。日本は自然遺産・文化遺産をつぶすのがうまいと思います。国民の遺産も、遺産相続が絡んで2、3世代の間に素晴らしい環境が完全になくなります。素晴らしい庭園や家屋をつぶして、跡にみにくい建物が建ってしまう。そのようなことをなくすためにも、鎌倉は世界遺産になるべきです。

日本だけの唯一のものである武士のスピリットを世界遺産として紹介すべきです。日本は中国人の頭の中では憧れの国です。文化大革命で壊した文化のルーツが日本にあると思っています。文化のエッセンスのある地として京都に行ったり、奈良に行ったり、伊勢神宮に行くのです。鎌倉はその次です。

中国人に来てもらって、日本の素晴らしい文化、日本に残る中国文化の素晴らしさを見つめてもらいたいと思います。

星野知子さん

鎌倉は武家・武士の古都。武士を英訳するとサムライになります。私たちにとって武士とサムライとは少しイメージが違いますよね。ただ、鎌倉の価値をわかってもらうには、日本側が伝統的に強い欧州の価値観を踏まえた推薦の仕方をすることが必要です。

鎌倉には江戸までの長い歴史、政治の形を作ったことの意義があります。鎌倉市民だけでなく、日本人の武家・武士との精神的なつながりを世界遺産という形の中で理解していただけたらいいなと思っています。

地形的にも、いにしえから土地の持つエネルギーが強い鎌倉です。そのエネルギーを大切にしたまちづくりを進めていただきたいと思います。

対談では「ストイックなサムライの倫理観、価値観を鎌倉が世界に向けて発信すべきです」（コラスさん）、「見て分かるものがないとなかなか難しい。幕府跡の遺跡も不明確な鎌倉の問題です」（星野さん）など議論が深められました。

◆国際専門家会議後の鎌倉の現状◆

文化庁主任文化財調査官に聞く

「武家の古都・鎌倉」の世界遺産登録をめざす３回目の国際専門家会議を受けて、４県市は文化庁と協議をして、平成22年度のユネスコへの推薦を延期しました。国際会議に参加し、鎌倉世界遺産一覧表記載推薦書作成委員会のメンバーでもある文化庁の主任文化財調査官・本中眞さんに「アジアへのまなざし」など国際会議後の鎌倉が直面する状況について聞きました。

（聞き手：高木規矩郎）

第３回国際会議での本中さん（右端）

◎国際会議

会議を通じて問題点が明らかになりました。国内では潜在的に皆が意識していた問題ではあっても、外から鎌倉を見た場合に課題として指摘されると新たな意味を持つことがあります。われわれ文化庁が関わって、新たなステージでの取り組みを強めてきたことは事実なのですが、独自の視点、実際の生の声を聞く機会というのはさほど多くはありません。そこで明確化された課題に対してどのように対応していくかということになります。それも（登録に向けて）ステップが一段のぼった段階での話でなくてはなりません。

◎アジアへのまなざし

国内で鎌倉が大事だということは誰もが分かっていることです。国際会議では、一国の中で価値があるというだけではなく、アジア地域における価値、顕著な位置づけが大事だということが指摘されました。アジア全体にとって、鎌倉で起こったことはどのような意味を持つのか。鎌倉に残された資産が、鎌倉で起こったことのすべてを代弁しているのだとすれば、それがアジア的文脈の中でどのように位置づけられるのかを明確化しないと、世界遺産条約が求めている顕著な普遍的価値（OUV）の証明にはならないということだと思います。

ＯＵＶの説明はある程度議論してきました。それに付随する評価基準についても議論が始まりました。その裏付けとなる調査研究やアジアとの比較研究もあります。比較研究についてはまだ議論は行われていません。さらに範囲が広がってきたところでの保存管理もあります。それらについて議論が十分に行われていないのが現実です。

鎌倉が評価基準のどれに該当し、どのように説明できるのかという議論が行われた時に、アジアの中での位置づけの問題が出てきました。推薦書原案に書かれている事柄の裏付けになる調査研究は、日本の国内における日本史の観点ではなく、アジア史の観点からのものでなくてはなりません。つまりアジアの都市遺産との比較の中で、鎌倉がどのような位置づけなのかを証明しなくてはいけません。アジア的な視点での具体的な議論がまだ行われていません。そこにようやく至ったということです。

禅がどのように鎌倉に伝わってきたのか、なぜ京都ではなく鎌倉に根付いたのかなど、解明しなければならない重要なポイントがいくつかあります。歴史的な事象に即して、外国人から具体的な指摘があったわけではありません。鎌倉の国内的な位置づけ、日本史における位置づけについてはとてもよくわかるのですが、世界的な視点の下に説明できることが必要であり、その中で直近のものがアジアの視点だというのが議論の流れでした。

◎保存管理

鎌倉は多くのお寺や神社などの敷地を選んで、ばらばらなものを寄せ集めて提案していこうというコンセプトできています。周りを囲んでいる山がお寺や神社と一体となっている環境であり、防衛都市として重要な地形上の役割を持っていて、そこにこそ鎌倉の特質があるというのが外国の専門家の非常に強いメッセージでした。今や範囲は山全体に広がりつつあります。そこをどのように保存していくのかという考え方の整理をしていかないといけません。

◎鎌倉の世界遺産登録

鎌倉の登録の可能性は十分あると思っています。今取り組んでいるのはどのように説明していくかということです。アジアのいろいろな遺産の中で、他の遺産には欠けているところを見つけ登録することによって、世界遺産が豊かに肉付けされていくのだということがちゃんと言えないと駄目です。禅が中国から伝わってきたとか、価値観の伝播も東アジアの文脈の中で動いているので、結局鎌倉でいろいろなものが出来上がっていった過程の大本はやはり中国です。

残されている時間はそう長くはないので、今回提出を断念した推薦書も年度内には何らかのメドを立てなくてはなりません。どういう取りまとめになるのか注視しています。